

02
2006

TOURISTIC ISLANDS

「探られる島」プロジェクト

刺激を求めて海外へ

僕らは刺激を求めて海外へ向かう。たまには退屈な日常から離れて旅をしたくなるものだ。万里の長城、ポンペイ、アンコールワット、エアーズロック、カナディアンロッキー、グランドキャニオン、コロッセオ、ピラミッドとスフィンクス、フォロ・ロマーノ、ペトラ、マチュピチュ、ヨセミテ……。世界遺産級の観光地はどれも刺激的である。壮大な地形

や石造りの遺跡が織り成す風景は、僕らの普段の生活からはかけ離れた世界である。そんな遠くの「刺激的な場所」に行くことができるのも「空の玄関」である空港があるおかげだ。今や空港から飛行機に乗れば世界中のどこにでも行くことができる。まさに空港は「刺激的な世界への玄関」と言うことができる。



エアーズロック (オーストラリア)



カナディアンロッキー (カナダ)



グランドキャニオン (アメリカ)



コロッセオ (イタリア)



ピラミッドとスフィンクス (エジプト)



フォロ・ロマーノ (イタリア)



万里の長城 (中国)



ポンペイ (イタリア)



アンコールワット (カンボジア)



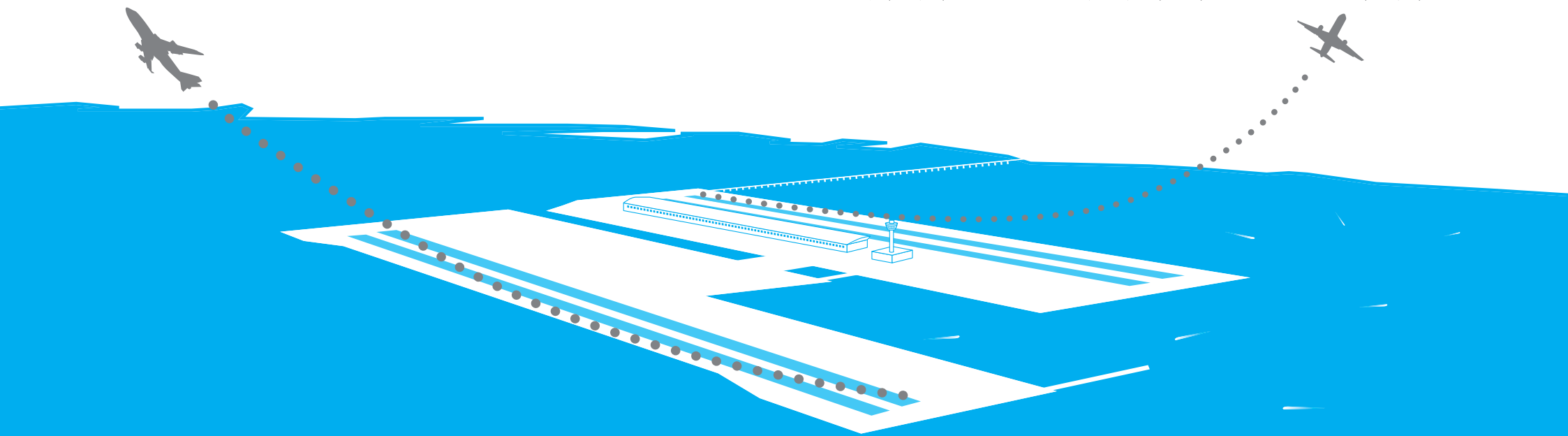
ペトラ (ヨルダン)



マチュピチュ (ペルー)



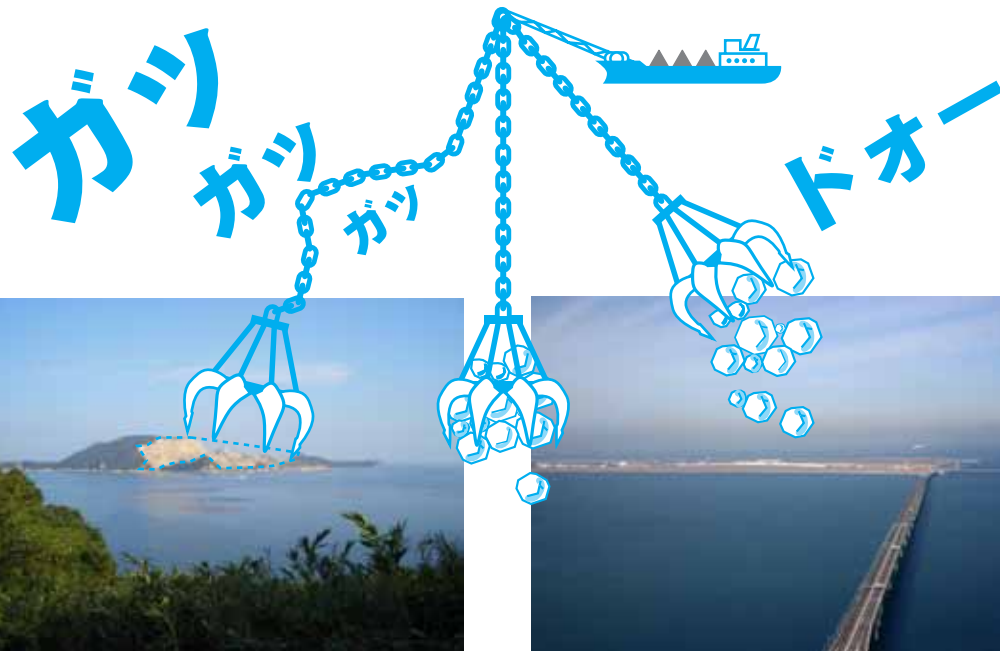
ヨセミテ (アメリカ)



関空をつくった島がある

僕らが刺激を求めて海外へ向かう際、頻繁に利用するのが関西国際空港だ。1994年に開港した関空は大阪湾の泉州沖約5kmに埋め立てられた人口の島であり、その埋め立には大量の石材が必要だった。その石材の多くが採掘され、運ばれてきたのがいえしま（家島群島）である。特に群島の中の一つの男鹿島は元来の地形がダイナミックに変わってしまうほど

の石材が採取されてきた。採取された石材は「ガット船」（石の積み下ろし用のクレーンとの巨大な爪を搭載した船）で埋め立て地まで運搬された。僕らが目にする関空は陸上に顔を出した表面の一部分のみで、その下には海底までいえしまから運ばれた途方もない量の石材が存在するのだ。まさにいえしまは「関空をつくった島」と言うことができる。



男鹿島

関西国際空港

いえしまには「刺激」がある

「刺激的な世界への玄関口である関空」をつくった島。そんないえしまを僕らが訪れて驚いたことは、いえしま自体が「刺激的な島」であったことである。いえしまにはいくつかの主幹産業が存在しているが、それらは僕ら

にとって刺激的なものばかりだった。だから今回僕らは家島本島と男鹿島を歩き回って、主要な5つの産業に関する風景を写真に収めた。そして、それらの中から「刺激的」な写真を選び出した。



採石業



座りたい



転がしたい



操作したい



石の上に乗りたい



荷台に乗りたい



近づきたい



すくい上げたい



叫びたい

採石業は、山に発破をしかけ、爆発させることによって岩石を採取する。採取した岩石は、土木建築用材、工業用原料などとなる。



砕石業



滑りたい



転がりたい



削りたい



踏みたい



登りたい



動かしたい



先端まで行きたい



選別しているところを見たい

砕石業は、大きな岩盤を徐々に砕いていき、ふるいにかけて選別し、使用目的別に製品化する。砕石には「道路用砕石」、護岸工事などに用いられる「割栗石」などがある。



海運業



飛び込みたい



上を歩きたい



回したい



掴みたい



ぶら下りたい



乗ってみたい



動かしたい



知りたい

海運業は、ガット船は、砂・砂利・石材の積降と運搬を行う。戦後数年は二本マストの木造船だったが、1960年ごろからガット船が導入され、飛躍的に効率が向上した。



鉄工業



整理したい



ほどこきたい



回したい



押したい



水面に映りたい



近づきたい



転がしたい



補給したい

鉄工所は、ガット船や漁船の修理をするために海に向かってレールが敷いてある。「ガット」や「バケット」などの海運の装置や、漁船のスクリューなどを製造している。



漁業



浮かべたい



仕掛けたい



広げたい



さばきたい



転がしたい



食べたい



手伝いたい



祈りたい

いえしまの漁業協同組合の漁獲高は、兵庫県下で1、2位を争っている。鯛やメバル、アオリイカなどが有名で、近年は「育てる漁業」として海苔の養殖なども盛んである。

好奇心をそそる風景



目につくものすべてに好奇心をそそられる



スケールの違いを体感せずにはいられない



思わず登ってしまった

家島の真浦地区の海辺を歩いて行くと、石を運搬するための「ガット船」が姿を現す。岸壁にその巨大な船体が並んでいる光景はとても迫力がある。さらに足を運ぶと、船舶を修理する「ドック」の姿が見えてくる。ドックには巨大なクレーンが何本もそそり立っていて船の到着を待っている。ドックの中に目を向けると金色に光るスクリューや重厚な碇などの船のパーツが整然と並んでいて美しい。宮地区の海辺を歩いて行くと、入り江にたくさんの小型の漁船が所狭しと停泊している。浜辺には大きな網やカラフルな浮きなどの漁具が干されている。男鹿島では港から島の内側に向かうと広大な採石地が出現する。山が削られた壮大な地形は圧巻だ。そこでは砂煙を上げて走る巨大なダンプカーが走り、岩石を選別するためのベルトコンベアーが音を立てて稼働している。岸壁ではガット船が大きな爪を使って石を掴み船体に積み込んでいる。石の重量で船体が倒れそうなほど傾く光景はとても迫力がある。いえしまの産業の現場は一般的な観光地でよく見られるような「遺産」ではなく、今でも営み続けている「生きた現場」なのだ。そんな現場で僕は多くの衝動に駆り立てられる。ガット船やダンプカーには乗ってみたいくなるし、碎石の丘やベルトコンベアーには登ってみたいくなる。船の修理の現場では作業の様子を覗きたくなる。漁で獲れた魚はその場で料理して食べたくなる。いえしまの産業の風景は、僕らの様々な好奇心を掻き立てる強い力を持っている。

いえしまの産業のこれまでとこれから

いえしまの石材産業の歴史は古く、大坂城を築いた際にも石垣にいえしまの石を使ったと伝えられている。いえしまの石材は品質が高く、石を切り出す技術も高く評価されてきたため、日本でも屈指の石材出荷量を誇るようになった。近年では関空や六甲アイランドの埋め立てにいえしまの石材が大量に利用されるなど、これまでの日本の「成長」を支えてきた産業なのである。また、良好な漁場で知られる瀬戸内海の播磨灘で展開される水産業も古くから盛んで、いえしまで獲れる魚介類はブランドとして名を馳せている。そんないえしまの既存の産業も、近年は低迷が続いているという。特に石材は公共事業の縮減など、時代の変化に伴い出荷量が減少しており、それに関わる採石、碎石、海運、鉄工（主に船の修理）などは以前に比べて稼働率が低下しているようだ。そんな折の2005年3月に旧家島町は姫路市に吸収合併されることとなった。新市の計画によると家島地区は「観光の島」という位置づけになっているらしい。観光の島を目指すのであれば、今後どんな「観光」を展開するべきかについて考える時期来到いていると言える。



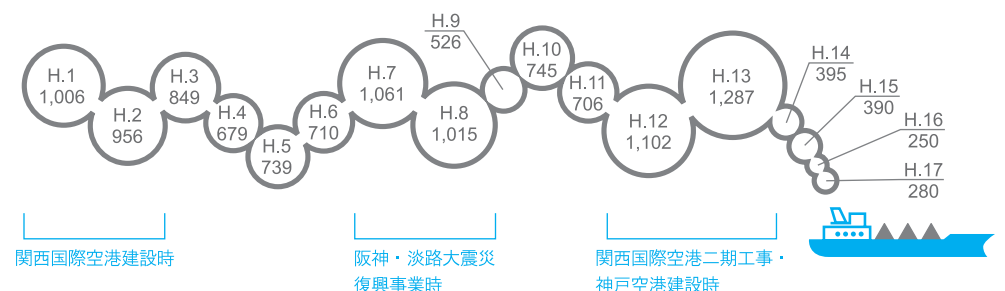
日本の「成長」を支えてきた採石地



海辺に放置された鉄の爪

石の出荷状況

上段：年度、下段：出荷数量（万³）



案内してくれる人が必要



ガット船を案内してもらおう



船の修理場の人からいえしまの話聞く



漁師さんから魚のさばき方を教わる

今回僕らはいえしまで「好奇心を満たす」ことができる貴重な体験ができた。石船組合の方の好意でガット船に乗せてもらえることになったのだ。その際に石船組合の方は、ロープを使った甲板へのよじ登り方の実演、石材の積み込み設備や操舵室の解説、さらには汽笛を鳴らす体験までさせてくれた。実際にその産業に従事されているプロの方の話はリアリティがあってとても面白く、本来素人が行うと危険を伴う体験も、そばで指導してくれたおかげで安心して行うことができた。だから他の産業の現場でもこのような体験ができればいえしまを訪れる楽しさをもっと深まると思った。既存の産業の稼働率が低くなる中、それらの産業に従事するプロの方々が、余った時間を島を訪れる人とのコミュニケーションの時間に使えば、「新しい観光の形」が見えてくるかもしれない。「観光」を独立した産業として新たに作るのではなく、既存の多くの産業と緩やかに繋がりがあ、島の人々が自らの生活レベルで訪れる人を「もてなす」という視点に立てば、いえしまは島の外の人々が継続的に訪れ、豊かな交流が生まれる島になる可能性を秘めていると思う。



ツーリストティックな島々に

「探られる島」プロジェクト2006は、平成18年の秋に家島本島・男鹿島での2泊3日のフィールドワークと大阪での4日間の会議を合わせた計7日間のワークショップの企画である。全国から集まったメンバーは、建築・土木・都市計画・ランドスケープ・経営・語学・写真など、多様な専門分野を持つ学生や社会人。僕らはそれぞれの専門分野や興味に沿っていえしまを歩き回るとともに、今回のテーマである「産業の風景」について写真を撮った。また、専門家のアドバイスを受けながらメンバー全員で一つのコンセプトに沿って議論し、冊子にまとめた。それがこの「探られる島」プロジェクトブック02だ。プロジェクトの中では「今後のいえしま」についてもみんなで話し合った。いえしまは産業構造の転換期にあり、島の人たちは今後「観光」についても考えていくようだ。そんな中、今回僕らがいえしまを訪れて感じたことは、「今ある生活の場の風景」や、その生活を営む「島の人たちとのコミュニケーション」の中に新鮮な驚きや楽しさがあったことである。僕らはそれらの中に「ツーリストティック（観光的）」な可能性がたくさん潜在していると感じた。だからいえしまは、むやみに「観光のための新しいモノ」をつくる必要はない、と僕らは考えている。今回僕らが感じた「ツーリストティック」な感覚をこれからも大切にしていってほしいと思う。僕らが今回の2泊3日のフィールドワークの結果から議論・考察した内容はいえしまの側面を捉えているに過ぎないのかもしれない。いえしまにはまだまだ隠された魅力があるはずだ。だからこれからも僕らは新しい仲間を連れて、たびたびいえしまを探りに訪れたいと思う。



プロジェクトの仲間たちといえしまを探りに向かった



男鹿島にも上陸し産業の風景を探った



夜を徹して「今後の家島」について話し合った

兵庫県姫路市家島町は、姫路港の沖合い約18kmに位置している。東西26.7km・南北18.5kmにわたって散在する大小40余りの島々は、瀬戸内海国立公園特有の美しい多島海の景観を織りなしている。今回のプロジェクトで探る対象となった島は、姫路港から高速船で約30分の家島と男鹿島である。家島には「宮」と「真浦」の2つの地区があり、両地区の良港を活かして宮には漁港、真浦には海運の基

地が存在している。また、男鹿島はダイナミックな地形を活かした石材採掘が盛んな島である。本プロジェクトブックでは家島（家島本島）と家島群島との混同を避けるため、家島本島を漢字で「家島」、家島群島全体をひらがなで「いえしま」と使い分けて表記している。（※採石地には許可なく立ち入ることはできません。）



いえしま（家島群島）



写真左上 真浦地区
写真右上 宮地区
写真左下 男鹿地区

「探られる島」プロジェクト2006

メンバー

芦辺 貴浩 / 阿部 雄一郎 / 井爪 康夫 / 大上 兵真 / 田路 美羽 / 谷 和典 / 中尾 匡利
中川 健太 / 長谷川 真咲 / 濱名 研 / 松田 剛 / 村田 庸介 / 桃野 紀子

アドバイザー

岡田 昌彰 / 綱本 武雄 / 山崎 亮 / 若狭 健作

「探られる島」プロジェクト実行委員会

岩本 陽子 / 金山 敏美 / 小島 雅也 / 阪田 崇仁 / 高島 一彰 / 中村 有作 / 福田 悦子 / 山下 芳正
金田 彩子 / 神庭 慎次 / 醍醐 孝典 / 檀上 祐樹 / 長生 大作 / 西上 ありさ

主催 「探られる島」プロジェクト実行委員会

協力 姫路市家島支所 / 家島観光事業組合 / いえしま荘 / 大立旅館 / やま一荘 / 割烹旅館志みず / 中村荘 / 中村 利公
NPO法人環境デザイン・エキスパート・ネットワーク / Kiss-FM KOBE
細野ビルディング / (株) studio-L / 魅力ある家島をつくらう会

「探られる島」プロジェクトブック02

2007年1月16日発行

発行 studio-S

トータルディレクション 神庭 慎次

テキスト 醍醐 孝典 / 西上 ありさ

編集 「探られる島」プロジェクト2006メンバー / studio-S

印刷 株式会社ラピト

本誌に関するお問い合わせは studio-s@npo-eden.jp

※本誌掲載の写真、記事の無断転載はお断りします。



『いえしま』を発見しに行く人、今後も大募集。

<http://www.npo-eden.jp/studio-s/>

「探られる島」プロジェクト

